

<p>第 1 号 (10P) 三十一年一月十三日</p>	<p>いまちまたには 音が満ちあふれている うたうことに、 喜びを見出した人たちの そしてうたごえ運動の 名のもとに 職場の 学校の 一般の 合唱団がなんとふえたことか けれど そのうたごえが 織りなしたのは ただ単に 町の 雑音でしかなかった うたうことの楽しさは うたうものにしか わからないが しかし あなたは わたしは 忘れてはいないだろうか ほんとうに うたう ということとは 自分自身の 心の中へ 真実と 愛情を うたいこむことだ ということ II 序 詩 II 浅井幸三 (五期)</p>	
<p>第 2 号 (4P) 三十一年三月五日</p>	<p>冬の寒さの中にも春のかおり をかすかに感じながら、空に向か つて大きく息を吐いてみる。白い 小人がフルートを吹きながら、ク ルクル輪を描き、大気の中に溶け 込んでいく。 それから正面を見る。雪どけの 水が、家の軒をスルスル伝って、 ポトリと水たまりの中に落ちる。 水の表面がキラキラと輝く。赤い セーターの女の子が、足の倍もあ るゲタをはいて走り過ぎる。カラ コロという音が気持ちよく耳の 中にしみ込む。 春だね！ 口笛を吹いてみる。口笛までが 空気に中に溶け込んでしまう。 みな溶け合ってハーモニイをつ くる。日陰にある氷さえも春の 中に溶け込んでいく。曲の名は春 だっけ！ さあ君、歌おうよ。ねえ、みん な！ メンタルハーモニイの上に立 ち、深いニューアンスのある音楽部 であらんことを。</p>	
<p>第 3 号 (4P) 三十一年六月十八日</p>	<p>率直にいつて、第一年度の昨年は 失敗だった。卒業生相互の連絡と いう第一目標を果たすには会誌 の発行が手薄であったし、在校生 とをつなぐ A K C 発表会では、ウ ィークデーというハンディーキ ヤップはあつたにしろ、合同合唱 もその成果はあげ得なかった。違 算つづきの第一年度というほか ない。 昨年八月曲がりなりにも発足 して、当初から大々的なことをね らったのではないとしても、まず 卒業生と在校生との提携を図り ながら実行不能、一部在校生から は相当の批判もあつた。わずかに 会誌を三度発行したことだけが 唯一の収穫といえるかもしれない。 私たちは、決してムダな一年を 送ったのではないはずだと信じ ている。音楽部員と卒業生を統括 する会という目的も、多少大きすぎ たかもしれないが……。やり直し のできる間は、何度でもやり直し てみたい。</p>	
<p>第 4 号 (6P) 三十一年十一月五日</p>	<p>A K C を出て合唱する機会を 失った人が多いことだろう。大声 を出して歌うことなど忘れてし まった人もあるかもしれない。 A K C を離れて、みんながばら ばらになった。東京へ出た人、関 西へ移った人、同じ市内にいなが らほとんど顔も合わさらない人も ある。この「ヴォーカライズ」は、 それらの障害をこえて進みたい。 みんなの声があふれ、だれものた よりが載る会誌でありたい。もし きのうの生活が未来には関係が ないとしても、きょうこの時間 には、あなたをほほえませるかも しれない。 これといつて大きな望みはな い。何といつて目的はない。ヴォ ーカライズの役目は、きのうとき ようを結ぶこと、そして、できる ならば未来にまでもつないでみ せたい。すべてはそこへ結びつけ ること。 みんなの会でありたい。</p>	
<p>II メンタルハーモニイ II 鈴木 寛 (六期)</p>	<p>II 委員会アピール II 浅井</p>	<p>II 委員会アピール II 浅井</p>

<p>第 5 号 (4P) 三十一年十二月十六日</p>	<p>先日、U氏の奥さんから音楽会の招待券をいただいた。いつも三階のC席より、はるかにステージを見下している身分の小生にとつて、招待席ときたのだから喜んだのは当然。ところがやはりC席の方がよい席であることを発見した。</p> <p>足はいつものC席がなつかしいのか、三階へ向かってしまう。せつかく上がってきたのだが、落ちついて聞くべき席がどうしても見当たらぬ。といって、また不思議な一角へ戻る気にはどうしてもなれない。</p> <p>ここでは目をみはるばかりの美しい着物やイブニングドレス、ネックレス、イヤリング等々はあまり目にはいらぬけれども、酒のかおりはもちろん、プログラムの音も、まして時計の音なども聞こえない。演奏が終われば万雷の拍手が起る。</p> <p>この席こそ招待席だ。C席ばんざい。</p> <p>II招待席とC席II抜粋 若林延昌(五期)</p>
<p>第 6 号 (6P) 三十二年一月一日</p>	<p>松沢 暢夫(六) ☆近況 ①財布の中カラッポ ②製図が期限内に間に合いそうもない ☆新年の抱負 ①ことしこそは②今年だつてどうせ同じさ。去年と③かわいらしい妹がほしい 景山幽香子(五) 年の瀬はとて忙しく目が回りそうです。新年は、計算すると正月休みが平年より多くなるそうですので、お客様もさぞかし多いこととごさいます。我々、タダ働きのオサンドンは割の合わない話になっております。</p> <p>原 まき子(六) 現在お人形に一生懸命です。毎日毎日あきることなく制作いたしております。幼いときからの好きなことを、現在に至ってもできる喜びを十分に味わいつつ、趣味を伸ばしたいとおもっております。</p> <p>西川 弥子(七) 最近とてもご多忙でいらっしやいますので、何も書くことがありません。</p> <p>=CHORUS=から</p>
<p>第 7 号 (4P) 三十二年三月二日</p>	<p>週一回けいこに通っているあるところで貸しピアノ(といつても、その会員だけなのですけど)を一般よりずっと安く貸してくれるので、頼んでおきました。翌日、その事務所の受付ボーイがかけてきた電話です。</p> <p>「もしもし、景山さんですね。あの……」 「モシモシ、ドナタ？」 「あのう…、あの、ゆ、ゆれ子さん……いらつしやるでしようか」 「ハアン?(だれのことかしら)」 「あの、ボ。ぼく、事務室のMですけど」 やつと電話の主はわかりました河、ゆれ子とは? しばらく考えていて、思わず吹き出しそうになって、あわてて受話器を押さえる始末でした。私の名前を説明するのに、ユレーイのユの字だと教えたので、こんなことになったのでしよう。</p> <p>II東京だよりII 景山幽香子(五期)</p>
<p>第 8 号 (4P) 三十二年三月二十日</p>	<p>この半年、及ばずながら、会長の任にあつて私が得たものは大きかった。私自身にプラスとなつた面が多すぎて、それに値するだけの仕事をみなさんに果たし得なかつたことが、かえつて恥ずかしくてならない。</p> <p>個人的な面で、私に寄せられた好意も忘れない。これが役得ならすばらしきものは会長というべきだろうが。</p> <p>私は疲れたのかもしれない。ふと、信じ込んでいた仲間にとつぽを向かれた「醜いアヒルの子」を思い知らされた。大きな流れの中で水を飲み干そうとしていたのに、川上ではそれを笑つて、水を流し込むいたずらな仲間もいたかも知れない。</p> <p>私は自信をなくした。丈夫ならだでもないで、当分休ませてもらいたいと思つてゐる。しばらくは自分を大事にしたい。新しい人に譲つて、会長の席を立ち去ることにする。</p> <p>IIひとりよがりの記II 浅井幸三(五期)</p>

<p>第 9 号 (6P) 三十二年四月二十三日</p>	<p>満十九歳の春を迎えた私は、東京写真大学生生活の半分を終了し、四月からは新たに、あと半分の一年を、中野にあるちっぽけな学校の中で勉学に励もうとしていくところである。</p> <p>高校在学中、また卒業後も、私は何の役にも立たず現在に至っておりますが、しかし、やはり胸の中では何かしてやりたいと思うこともしばしばです。そこで、ふと、思い浮かんだのが、キヤノン・シリーズなのです。</p> <p>父に譲ってもらったキヤノンでAKCヴォーカライズの人々を毎月一人ずつ撮影して皆様にその人の近況を紹介するとともに、私自身の芸術的写真?の発「表にしてみたらと考え」(推定)ついたので。私がこれから進むべき道である写真を通じて、皆さんとのまじわりを続けていきたいと思っております。五期ともなると、顔も名前も知らぬ人が多いのですが、折りをみては撮影し、話もしていきたいと思えます。</p> <p>キヤノンシリーズ登場!! 永井 充 (八期)</p>
<p>第 10 号 (4P) 三十二年五月二十一日</p>	<p>ことしから、土曜日の五時限はクラブ活動の時間と定められました。この起こりは、クラブをさぼるのを防ぐことであつたようですが、これは逆効果で、クラブ活動のために午後まで残つていくような殊勝な人は、部員の半分ぐらいです。これは三年生が全部抜けてしまうからでしょうか。数では一番多いから。</p> <p>四月二十七日にする予定だった卒業生との合同合唱ができませんでしたし、卒業生といつしよということのきらいな二年生です。この間にはまた大きなミズが指導者のない音楽部は困りますので、夏休みにでも一度合同合唱などをする必要があるんじゃないかと思ひます。文化祭に合同合唱をすればしたら、なおさら、これは必要です。</p> <p>AKCから!! 森本 進 (十期)</p>
<p>第 11 号 (6P) 三十二年六月二十三日</p>	<p>「招待席C」って何だ、とおつしやるのですか。これはしつれいしました。そういえば、こんな記事ははじめてでした。</p> <p>日ごろつながりに乏しいAKCヴォーカライズが、好評の「ミヤノンシリーズ」に次いで、新しい企画として生み出したのがここにいう「招待席C」なのです。月に一度、そのときどきの音楽会に、二名ずつ会員を招いて、そのあとで感想を語り合つてもらおうという筋書きですが、いかがでしょうか。もつとも、あまり金持ちでないメンバーの集まりですから、「招待席」とはいつても「C席」にしか該当しないというのが「招待席C」なるいわれです。これが、たとえわずかでも、皆さんとAKCヴォーカライズとのつながりを深めることに役立つならば、企画者としては、これにまさる喜びはないのですが…。</p> <p>招待席C①前文 浅井</p>
<p>第 12 号 (4P) 三十二年七月二十二日</p>	<p>学校時代のアダ名は「カマキリ」だった。顔が逆三角形で、あごの先がとがっていたから。卒業してから、試験で「もまれることもなくなったせいだ、だんだん福々しくなつて、丸顔になつたよな気がする。</p> <p>先日、若い娘ばかり数人がワイワイだべつていたとき、ふとした事からアダ名に話に移り、私のことを「ミルク」だといひ出した。ポワポワと何の心配もなく育つて、いまだにママのミルクをのんでいるような感じがするからだというのである。考えてみると、決していいニックネームではない。よくいえば世間ずれのしていない、おとなしい女の子だけ、悪くすればカマトトの、甘えん坊の、世間知らずの、もつとひどくいえば最近流行のベビードール式じゃないのと、ひとりひがんでしまった。それなのに、あわててあやまられるとつい許してしまふところに、ミルクのミルクらしい点があるのかもしれない。</p> <p>東京だより⑥!! 景山幽香子 (五期)</p>

<p>第13号 (4P)</p> <p>三十二年八月二十三日</p>	<p>◇：予告以来半年を経過した「旭丘高校音楽部史(昭和二十六年「三十年度)」は、このたびようやく発行の運びとなった。内容はしばしばいつているとおりで、今後この種歴史が継続発行される場合を考え、今回のものの副題を「カデンツァ」とした。</p> <p>◇：「一号室千昼一夜物語」以来のもので、統一を欠くうらみはあるが、各年度の部長の個性もうかがわれておもしろい。創立十年のAKCの歴史を、できれば初年度からずっとまとめたかったが、何ら組織を持たぬ四期生以上とは連絡もとれず、不完全に終わったことは遺憾にたえない。やむをえぬことながら、あとがきで簡単にふれるにとどめた。</p> <p>◇：この五年史を通読しての、みなさんの感想を承りたい。しるさななかった中にも、忘れられぬエピソードがある。そんなものも紹介していただきたい。</p> <p>Ⅱ「カデンツァ」案内Ⅱ</p>
<p>第14号 (4P)</p> <p>三十二年九月二十五日</p>	<p>○：高校を出、社会の空気に当ると昔を忘れるものだろうか。それにしても、この会がこんなにまで基盤のもろいものとは、愚かにも今まで気づかなかった。個人的には、みない人だと思ひ、どの人にも一様に好意をいだいてきた自分だったが、一つの組織として、ヴォーカライズの立ち場に立つたとき、そむかれ、無視されたことに、この上なく屈辱を感じた。そんな私を、だれよりも自分がかわいそうだと思うのだ。</p> <p>○：今月限りで、態度不明の人に對する呼びかけ、あるいはささいなサービスの行為は打ち切らせていただく。報いられることの少なすぎた一部の人に、会長としての立ち場からこのさいおわび申し上げておきたい。「招待席C」を続けた一委員、「キヤノンシリーズ」で尽くした一会員の好意を、お人よしとばかりに冷笑するに終わらせたくはなかった…。</p> <p>ⅡインベンションⅡ</p> <p>浅井</p>
<p>第15号 (6P)</p> <p>三十二年十月二十五日</p>	<p>合唱は「質より量」というより「数」でこなした。混声七、男声十、女声八の計二十五曲をやつてのけた器用さは、実にあつぱれというほかない。が、主として女声は二部、男声は三部合唱である。男声合唱がいちばんよかつた。二十六年以来六年ぶりの復活で、心強いものを感じさせる。パートを自分勝手に選ばせたのか、変な部分もあつたが、まずは久々の男声合唱として買える。</p> <p>反対に感心しなかつたのが女声合唱。一番の欠陥が練習不足、そしてその二がソプラノの低調さ。いつたいだれが歌っているのかわからないほどさびしいものだった。</p> <p>混声合唱では明るい曲だけが及第。というのは、楽しんで歌っていたからで、こうした気分が大切なのだ。</p> <p>ⅡAKC発表会特集Ⅱ</p> <p>浅井</p>
<p>第16号 (6P)</p> <p>三十二年十二月二日</p>	<p>ことしの正月に新聞でベルリンフィルの来日を知つてから、どんな無理をしても行こうと期待していたその日が来ました。ついに世界第一のオーケストラを、指揮者を見、そして聞いた。この感激は一生忘れられないでしょう。</p> <p>このオーケストラは、全く指揮者とオーケストラが一体化して、音楽を完全に理解しているといふことが、演奏中によくわかりました。カラヤンはもちろん、団員のほとんどが暗譜で、演奏中にスコアをめくる音もほとんど聞こえず、これではなればだめだと思ひました。いかにもミュージシャンタイプの人の楽しいつどいといったベルリンフィルの演奏は、親しみを感じさせるもので、ふんいき自体も格別よかつたようです。日曜日の立体放送でまた感激を新たにする楽しみを残して、最初にして多分数年は聞けないベルリンフィルの演奏会も、こうしてついに終わってしまいました。</p> <p>ⅡベルリンフィルⅡ</p> <p>中尾桂二(七期)</p>

<p>第17号 (4P) 三十二年十二月二十五日</p>	<p>景山幽香子(五) 先日胃下垂と診断されたのが別の病院ではなんでもないといわれ、とんだ誤診でした。何だかからだが軽くなったような気がして、病は気からというのもほんとうらしいので、やれやれというところです。 中尾桂二(七) ニワトリを虐待したおぼえはないのに、ことは全く私にとつては厄年であった。正月早々カゼをひき、暮れになってまた流感和、合計二十五日ほどミスミス浪費してしまった。来年はいぬ年である。ペットの秋田犬を大いにかわいがってやるつもりである。 森本進(十) ただいま受験勉強中?私でもはいれそうな大学をさがします。 増田容子(六) 何とか売り出しで、それはそれは忙しく、サボルひまが全然ありません。</p> <p>=CHORUS=から</p>
<p>第18号 (4P) 三十三年一月二十五日</p>	<p>◇…現在の企画、だいたいけつこう。でもときどき変わったことが掲載されるといいと思う。 ◇…会員がみな投稿できるような一定のタイトルをつけた記事を募集するとよい。たとえば、「天城山心中をどう思うか」てなものである。 ◇…キャノンシリーズはぜひ続けてほしい。同期以下の人々が全然わからないので。 ◇…AKCのニュースも、いろいろと知りたい。一号室の空気はどんなに変ったか。 ◇…「招待席C」「キャノンシリーズ」などたいへんよい企画と思う。現行のままぜひとも続けていただきたい。会員の皆さんの近況報告を会誌を通じてしていただきたい。 ◇…会員のせい、いまのところページ数も少なく、投稿者もあまりないようだ。しかし、「ヴォーカライズ」が、これだけ続いて発行できるということでは、関係者諸氏に敬意を表する。</p> <p>IIアンケートIIから</p>
<p>第19号 (4P) 三十三年三月六日</p>	<p>昭和三十一年十二月(第5号)から、「ヴォーカライズ」の紙上を飾っている景山幽香子さんの「東京だより」が一冊にまとめられました。日々の生活の中からつづられた、これらの文章は、観察力の鋭い、そして機知に富んだ景山さんらしさを十分に伝えてくれるものといえましょう。書くことの有意義さを感じさせてくれる好著です。</p> <p>II「東京だより」 近刊予告IIから</p> <p>○大阪地区の人々と会えたのはうれしかったが、予定していた「招待席C」を實行できなくて心残りであった。これからは各地区ごとの集まりを催すよう努めたこと、と思ったことである。東京支部、大阪支部というのはまだ夢でありすぎるだろうか。</p> <p>IIインベンションIIから 浅井</p>
<p>第20号 (8P) 三十三年三月二十三日</p>	<p>生まれてこの方、幾度春を迎えたことか。考えることもなく、ただ自然に過ぎてしまった。こうして振り返ってみると、その迎え方もさまざま、ほんとうに思い出深い感があるのだけだ。 昭和十六年、私はチヨークで書かれた円の中に立っていた。国民学校一年の知能検査だった。隣席には私よりチビのラジオ屋の栄ちゃんがいっぱい。 その次の年、せっかく仲よしになった上級生のツクちゃん:彼は全校でただ一人、数学に秀をもらったのである:ともさよならをしなればならなかった。父が上海に転任したので、広島の実家に行くため。「駅へ送ってくんだから、必ず学校へ呼びに来てね」と彼はいったけど、私は呼びに行かなかった。私のために秀が取れなくなると気の毒だと思ったので。アカシアの白い花が一面に咲いていたのは思い違いだろうか。</p> <p>II東京だより12IIから 景山幽香子(五期)</p>

<p>第21号 (GP) 三十三年四月二十七日</p>	<p>私のオペレッタ主演が確定したのは一月の下旬のクラブ集会のときでした。それから参考のためにオペラ「マルタ」の観賞などしましたが、マラソン大会、第四回学力テストの障害にはばまれ、十分な練習ができなかった。しかし、これは出演者全員にいえること、今度のオペレッタの失策点はいえ、すべて「時間不足」に集中されるだろう。そのため決行の前日になっても予行演習ができず、当日そのまま本番。開幕のとき、観覧者とは見渡すと、広い講堂にたった二、三人だけ。これでは先が思いやられると気にしていたが、それでも三々五々と集まり、閉幕のときには講堂の半分を占めていた客席もぎっしり詰まり、満足げに幕をおろした次第。</p> <p>   オペレッタ「影をなくした男」に主演して    横橋貞雄 (十二期)</p>
<p>第22号 (GP) 三十三年五月二十七日</p>	<p>「ビール・コンサート」と盛夏を思わずこのタイトルにして冷えたビールの味(もちろん想像です)とは、あまりびつたりしたコンサートではないように感じました。プロにやわらかいものが並んでいるところは、センを抜きながら聞くという感じなのですが。要するに、こういう種類のコンサートを聞いて、詳細に演奏、曲目うんぬんなどということはありません。まあ、そつなく音楽が流れていけばよいと思うのです。そつなく流れていなくても曲目四、五は聞き流せます。軽妙なしゃれ気が感じられな。もつとも大物をひいてどうにもならないというよりはいいかもしれない。しかし、ポップスコンサートだからといって、しゃれ気がない曲は感心しない。シヤブリエ、フアリア、レクオーナなどという粹人の作品をやるべし。</p> <p>   「招待席C」 東響コンサート    安井邦夫 (十二期)</p>
<p>第23号 (GP) 三十三年七月三日</p>	<p>こんどのアンケートでは、ヴォーカライズの問題から一、二を取り上げて、皆さんの意見を聞いてみた。回答率(五割五分)の低いのは残念だが、これを基にして委員会でも話し合ってみよう。けれども、懸案はそのまま残された感じで、たとえば、ヴォーカライズのつどい、あるいは会員構成については意見が全く分かれている。合同合唱にしてもやる方がいいには決まっているが、時間の都合で参加できないという人ばかり。会費を上げてよいとする人が、ほとんど委員会運営に参画した点などもある。やはり問題とされてもいいだろう。</p> <p>   アンケート報告    から</p>
<p>第24号 (GP) 三十三年八月三日</p>	<p>◇：現在工事中の四階継ぎ足し工事(西半分)は九月に完成、それとともに音楽室は四階に移ることになっている。現音楽室の真上に当たり、防音装置も付随的に研究室が隣合って設けられる。この研究室には都築教官がはいる。</p> <p>◇：七月の旭丘は、七日に東京芸術大学音楽学部合唱団(混声)十二日に名古屋大学男声合唱団を招いて演奏会を開いた。後者にはAKCも賛助出演し一ステージ持った。</p> <p>◇：旭丘の音楽教生に桜山崇子さん(七期)が赴任、一七日にはAKCの練習に立ち会って批評を述べた。夏季練習には水野俊彦君(六期)が指導に来部する予定。</p> <p>◇：AKCでは夏季レクリエーションとして、七月二十九日に恵那峡へ出かけた。卒業生側からは森本進君(十期)が参加、楽しい一日をすごした</p> <p>   AKC ニュース    から</p>

<p>「まぼろしの」100号記念号の原紙はここまでで終わっています。原紙を切られたのは、浅井幸三さん（五）だということです。前頁までの各号の記事抜粋は、欄のタイトルがありません。「座談会」で「100号でハイライトをやるうと思って」という浅井さんの発言があるので、「(各号の)ハイライト」というのがタイトルかもしれない。この欄はこのまま行くと99号までか100号まで続きます（途中3回欠号がある）。またこの他に特別号や号外があります。数えてみるとたぶん40ページまでとなります。</p> <p>その後、AKCヴォーカライズの歴史が計画されていたのではないだろうか。パーティー開催後に発行された十周年記念号に「AKCヴォーカライズ十年の歩み」という表が二ページにわたってまとめられています。これに追補したものでしょうか。しかし、その記事には40年度まで記してあり、100号で付け加える年度が二年しかないのです、ためらうかも知れません。</p> <p>「座談会」記事中には、会員全員のプロフィールを掲載したい、という言葉もみられます。99号にある「会員便覧」という題のよ</p>	<p>うです。先生方のお言葉もほしいところ。さらにインベンションかそれにあたる「編集後記」が想定されます。全部で60ページ位が企画されていたのでしょうか。とりあえず、「十周年記念パーティー」から同記念号までの時間関係を記します。</p> <p>1965.11.14 十周年記念 パーティー</p> <p>1966.3.27 88号 1966.5.22 89号 1966.7.10 90号 1966.9.7 91号 92号は欠号</p> <p>1966.11.9 93号 1967.5.14 94号 1967.7.2 95号 1967.8.13 96号 1967.10.4 号外 たぶんこれに (昭和42) 十周年記念号を同封 記念号には発行日は 不記載。</p>
<p>入力にあたって、数字や括弧・英語などの表現を変えました。ワープロ入力の制限のためです。明らかな誤りは正しました。入力や読みのミスがあるかも知れません。</p>	<p>お気付きの点をご連絡下されば幸いです 岡</p>